

終戦はいくつの時と問いくる年上の人も少なくなる。新鮮である。古い歌の秀作と思う。終戦はいくつ

る。新鮮である。古い歌の秀作と思う。終戦はいくつ

の時？ 七〇年安保はいくつの時？ 阪神淡路大震災は

いくつの時？ といった聞き方をするときがある。自分

より若い者を自分史の年表にあてはめて理解したい、と

いうわけである。

酷暑日のホスピス棟はつい先刻影をもたない時をむかへぬ ホスピスの患者たちが迎えた光に照らされながらも影のない時間。「影をもたない時」とは、太陽が真上に来た時の意味だろう。生と死に敏感なホスピスという場所を流れる、しばらくの非日常的な時間。

宇都宮とよ 松岡秀明 紫陽花の準備ができるしないのに降ってしまう雨。君

を怒らす

佐佐木定綱

あつ今のもの言い父のもの言いだわたしの中に父育ちゆく ふと気がついて驚いている感じがユーモラスでいい。他界してから心の中の父が次第に成長していく。そういう感覚がなんとなく分かるような気にさせられる。紫陽花の準備ができるしないのに降ってしまう雨。君

藤島秀憲

紫陽花の事情を気にする「君」。紫陽花の事情は分からぬが、君の気分は理解しているという、そんな理屈を表だてて、ユーモアを引き寄せている。せつかくだから雨に濡れる紫陽花が見たいという意味を、理屈に置きかえたアイディア。

我が死にし後の日めぐり誰か繰る小春の大安ひと日を捲る 加賀谷実

毎日一枚ずつめくる日めぐりカレンダーである。長く愛用してきたのだろう。自分は習慣でかなづめくるが、自分以外だれがめぐってくれるだろうか。だれもめぐつてくれそうにない、というのである。ふと気づいた自画像である。なお、「小春」は旧暦十月。

去年よりも浅くなりたる淵底に土用休みの尺岩魚見

し上がりくる 小笠原政雄

尺岩魚に昂奮する釣り好きの作者ならではの一首。何年、何十年ずっと見ている川である。同じように見える川だが、くわしくみれば瀬や淵が微妙に変化をくり返している。ちなみに平安朝時代に、すでに「世の中は何か

ながら思いの切実さを読ませる。

戸塚園枝 佐藤モニカ 夫をうたう歌としてじつに楽しい一首。意外性、ユーモア、そして愛情が読める。ポイントは一首の場面が読める点だ。私はアルバムを見ている場面をイメージする。

海辺より陸に向かひてひたひたと次第にアメリカ押し上がりくる

岩国の中軍基地が広がり、オフリミットの地域が広がりつつある現状をうたう。特別な軍事用語などを用いずに、「ひたひた」「押し上がりくる」という日常語を用いながら思いの切実さを読ませる。